

ケーツー

K2(8611m)日本人女性初登頂・小松由佳さんを迎え

植村直己冒険賞授賞式・記念講演会

「情熱が可能性を生み出す」

記念メダルと楯を受け取り
笑顔で記念撮影に應じる小
松さんと中貝市長



選考評には、作家の椎名
誠さんが登場。「小松さんは
非常にハキハキしていて聡
明な人。日本に明るい話題
を与えてくれた」



記念講演で目を輝かせて冒険の足跡を語る小松さん

6月2日、日高文化体育館に 2006「植村直己冒険賞」受賞者の小松由佳さん(24歳・東京都在住)を迎え、授賞式を開催しました。

小松さんは、昨年、母校の東海大学K2登山隊の一員として、日本人女性で初めて世界第2位の高峰K2(8611m)の登頂に成功しました。

当日、中貝市長からメダルと楯を受け取ると、小松さんは「私だけでなくK2登頂を夢見てきた5人の仲間とともに受け取った賞です。今後も支えてくれたみんなへの感謝の気持ちを忘れずに生きていきます」とさわやかな笑顔で受賞の喜びを約750人の聴衆に話しました。

また「自分らしく生きる方法～私の挑戦～」と題した記念講演も行われ、これまでの冒険の足跡を映像を使って生き生きと話していました。

授賞式終了後には、植村直己さんの出身地区である国府地区公民館に会場を移動し「小松由佳さんを囲む会」が開催されました。地元有志や植村さんの同級生など約100人が心のこもった手料理で小松さんをもてなし、授賞式では聞くことができなかった話や植村さんの思い出話などで大いに盛り上がりました。

《問合せ》植村直己冒険館 ☎44-1515

講演要旨

自分らしく生きる方法

私の挑戦

私が求める山登り

秋田市に生まれ育った私は小さいころから山を見て育ったので、山への憧れがずっとありました。高校に入学したときは、迷わず登山部に入部し、山登りを始めました。ただ、部の活動は競技登山が主だったので、後で振り返ったときむなしさを感じました。

私は、未知の世界を求めて山登りをやりたかっただけで、誰かと競ったり、争ったり、タイムを求めたりしたかったわけではありませんでした。私が求める山登りは、何かに縛られるものではなく、自分を最大限に表現できるものだったのです。

女性の立場で悩む

大学の山岳部では、女性という立場にとっても悩みました。例えば、山岳部では集団で登山するため、体力のない女性がいても一緒に登らなければなりません。でも、山は男性、女性を分けずに、同じようにつらさを与えます。そこで私はあえて自分で、男だから、女だからと区別する必要はないと思い直し、強い意志を

持つて登山をやることにしました。

挫折を味わう

大学を卒業して何回か海外登山を経験しましたが、その中で大きな挫折を味わいました。遠征で人間関係に非常に悩み、帰国してから山登りをやめることを考えました。山への情熱を失ったときにノイローゼになり、自分はなぜ生きているのか、なぜ存在しているのか分からなくなりました。その後、誰にどう思われているのではなく、自分が自分の行動をどう思っているのか、自分がどう納得できるのかということに気が付き、挫折を乗り越えることができました。

チャンスとは

挫折を乗り越えたとき東海大学山岳部からK2へ誘いがありました。チャンスには2種類あると思います。一つは自分で作り出すことができるチャンス、もう一つは、人から与えられるチャンスです。人から与えられるチャンスは、その時期を逃すと再び巡ってくることはありません。私は憧れの山に登れるチャンスを絶対に逃したくないと強く思いました。

生きていることを実感

K2登山は、落石が多くとても危険で、人間の無力さを感じました。

一方、そういう状況の中で山登りをしている瞬間が一番生きていることを実感できました。高度感、恐怖感、緊張感という感覚の中に身を置くとき、自分が自分らしくいられる気がしました。だから、山登りはやめられません。

運・不運

危険な状況の中になると、人間の命とは運・不運だと感じさせられます。運・不運とは日常生活の中ではとてもあいまいで、人任せな表現だと思われませんが、登山では非常に大切な要素です。天気や山のコンディションもすべて運・不運で、それが人間の生死にかかります。ただ、私は、運・不運については自分が今までやってきた結果だと信じています。

登頂の瞬間

最後のベースキャンプから約15時間歩き続けてやっと山頂に到着しました。山頂に達したときは、とにかく信じられませんでした。今までここに来るためにいろいろの人に支えられて、生かされて、押し上げられたという気持ちで涙があふれました。着いた瞬間は、まだ雲がかかっていた何も見えませんでした。次第に青空が見えてきて山が自分たちを受

け入れてくれたかのような感じがありました。

豊かさとは

パキスタン人のポーターたちと2カ月間ともに暮らしました。日本人と比べて貧しく、厳しい生活環境なのにみんないつも目をキラキラさせていました。その訳は、生きていることをすべて特別に考えているからだと思いました。生きることは、決して当たり前のことではなく、ありふれたことでもなく、すごく奇跡のような特別なことだと思いました。

私は、豊かさとは、与えられた環境の中で、日々、感謝して生きられることだと思っています。

K2登山で学んだこと

人間は一人で生きているのではなく、いろいろの人に生かされていること、同じように、自分も知らないところで誰かを生かしていることに人間の相互のつながりを深く感じさせられました。

植村さんのすばらしさは、その人間性もさることながら、広い視野を持つて世界を舞台に挑戦し続けた点にあると思います。私が昔から信条にしている言葉は、「Passion Creates Possibility」(情熱が可能性を生み出す)です。これはどんな

人でも無限の可能性を持つていて、可能性は開拓し続けることができるという意味の言葉です。私も植村さんのように自分の可能性に挑戦し続け、世界を広げていきたいです。

誰も人生は一度きりです。後悔のないように日々生きたいと思います。高い目標があっても、一つひとつステップをしっかりと踏んで登っていけば、必ずかなえられると思います。今後も、私ができる最高の生き方をして、一人の人間として豊かに輝いていきたいです。



植村さんの地元で行われた「小松さんを囲む会」。小松さんは「皆さんの温かい気持ち伝わってきました」とお礼を述べた。「直江ちゃんは一倍感えりませんでした。相撲をすると勝つまでやめませんでした」と同級生などから植村さんにまつわるこぼれ話も紹介された。